ACfAヤンデレ集

粗製のss好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＢＦＦ所属のオリ主がなんかいろいろヤンデレリンクスとちょめちょめする話。※原作未プレイでも楽しめるように頑張ります。ただちょいグロあり。

目次

リリウム編
リリウム・ウォルコットの場合 1
リリウム・ウォルコットの場合…2 10
リリウム・ウォルコットの場合…3 16
リリウム・ウォルコットの場合…4 24
メイ・グリンフィールドの場合 32
メイ・グリンフィールドの場合…2 39
メイ・グリンフィールドの場合…3 44
リリウム・ウォルコットの場合…5 50

リリウム編

リリウム・ウォルコットの場合

この世界の歴史は面白い軌跡を辿っている。

増えすぎた人口と慢性的なエネルギー不足及び食糧不足により、国家の統治能力は著しく低下した。対して新物質『コジマ粒子』を発見し、膨大かつ新しいエネルギーを得た大企業の数々は、彼らによる秩序を構築すべく国家に全面戦争を仕掛ける。後に国家解体戦争と呼称されるソレは、たったの一か月で終わりを迎える。無論、企業の勝利と言う形でだ。それが17年前。

当時、活躍した兵器の名を『アーマードコア・ネクスト』という。

コジマ粒子をふんだんに利用した全く新しい兵器と戦略により、国が率いる軍隊は成す術もなかった。圧倒的な機動性、装甲、破壊力。環境を極端に汚染する事と戦力が個人に寄る事にさえ目を瞑れば、まさに最強の名に相応しい兵器であると言えよう。

なんにせよ、こうして企業が統治（パックス・エコノミカ）する世界は成された。

この時点でディストピアの匂いがプンプンするがなんてことは無い。この世界のぶっ壊れ具合はこの程度じゃあ留まらない。

企業にとって戦争は経済競争の一環である（もっともそれは昔も変わらないのかもしれないが）。ともすると人の生死すらも金で勘定される訳で。現代日本人の感性を存分に発揮してしまう俺としては信じられないことだ。

しのぎを削り合うような企業同士の小競り合いが数年続き、ソレが激化したのが十年ほど前。この戦争により各々の企業は国家解体戦争で活躍したネクスト搭乗者、オリジナルの大半を失った。この戦争のまたの名をリンクス戦争といい、その名の通りネクストを駆るリンクスが戦局の全てを左右させた。

しかしそれはリンクス一人が保有する戦力があまりにも突出している事を意味していた。己が生み出した存在を畏怖し、またその不安定さから企業は凡庸でも扱える超巨大兵器『アームズフォート』を開発する。そうして、企業間の争いはネクストからＡＦへと取って代わった。もっとも、それでネクストの戦力が変わる訳でもなく。強力なままリンクスは都合のいい尖兵として扱われるようになった。

そんでもって、リンクス戦争により汚染された地上を見限った企業は生活圏を空へと移した。無論、多くの市民を地上に残したまま。個人的な所感だが、糞食らえである。

「畜生、これじゃあ何のためにリンクスになったんだか」

別に空（クレイドル）に住みたかったわけではない。ただおいしい飯とやわらかいベッドで寝ることが出来れば満足だと思っていた。しかし実際は――――

「よぉ、ダイキ。今日も依頼が来てるぜ」
ジョージ・オニール。俺の嫌いな男である。いや正確にはこの男自体は嫌いではないのだ。ただこいつの持ってくる依頼が心底不快なのである。いや、それも違うな。依頼自体は飯のタネだからやらなければならない。
「おいおいおいおいおいおい。オニール君、昨日、俺、何回、依頼こなした？」
「……はは、５回だったかな？」
気後れするように答えるオニール君。
「そうだよ？　その通りだよ。で？　今日は何件来てるのかな？」
「あー７件だな」
え、なんか昨日より多いんだが？
「過労死するよね？　俺コジマに犯されて死ぬよね？」
「まぁなんだ、断ればいいんじゃないか？」
「お前それ本気で言ってる？　どうせあの爺が回してきた仕事なんだろう？　違うかな、オニール君？」
「一応ＢＦＦからって事になってるが、まぁそうだろうな」
「拒否権ある訳ないじゃん？　俺思いっきりＢＦＦ所属のリンクスなんだが？」
「……だな」

唐突だが、俺は転生者である。経緯は割愛する。重要なのは文字通り世紀末だった地上で、路頭に迷っていた俺をあの爺こと王小龍（ワンシャオロン）が拾ってくれたという事である。つまり恩がある。そしてその恩はとてもじゃないが、返し切れるものではない。

だから俺はヤツの、企業の傀儡になることを良しとしている。

「いつも悪いな。愚痴ってすっきりした。で、内容は？」

「これで楽になるんならお安い御用だ。じゃあ、仕事の話をしよう――――」

仲介人の懐の良さに脱帽である。いやほんと、ちょっと自重しないと。

★

「……ふう、２４時か」

すべての依頼を終えた頃には既に一日が終わろうとしていた。

俺のＡＭＳ適正（ネクストを精密に操作する目安）はさほど高くない。しかし条件付きで俺のＡＭＳ適正は馬鹿みたいに上昇する。その条件と言うのがセロトニンが不足している状態、言い換えれば脳が疲労を感じている時である（正確には違うらしいが）。だから王小龍は俺をこき使うのだろう。その方が効率が上がるのだから。

「それにしたって、最近はちょいと仕事が多すぎな気がするが」

「私もそのように見受けられます。王大人には伝えておきましょう」
「ん？」
声のした方に振り向くと銀色の女性、いや少女が佇んでいた。見知った顔に思わず「よう」と手を上げた。
「はい、ご機嫌よう。ダイキ様」
少女は見惚れるほどに優美な一礼をする。彼女の名はリリウム・ウォルコット。先ほどの優雅な所作と手入れの行き届いた銀髪、何よりも上等な衣装を纏っている事からも分かる通り、所謂お嬢様って奴だ。しかしそれと同時に、俺と同じリンクス（戦争屋）でもある。ただ一般兵に過ぎない俺とは違い、彼女はＢＦＦの切り札とも言える存在である。実際クソ強い。
「おう。しかしこんな夜更けまで起きてるとは。美容に悪いぜ？」
「……そう、ですね。ご忠告痛み入ります」
やっべ、年ごろの少女にはタブーな話題だっただろうか。いきなり沈んだ顔つきになる彼女を見て、たまらず話を変える。
「あーそれで？　まさか何の理由もなしに待ってたわけじゃないだろう、リリウム嬢」
「理由がなくては貴方の帰りを待ってはいけないのでしょうか？」
不満げに見上げてくる少女。やっば、かわいい。歳が離れてなければ絶対口説いてる

自信がある。

「……いけなくはないが。ま、ありがとな」

「いいえ、礼には及びません。ところで、まだ夕食を済ませてないと伺いましたが」

「ああ、なんならマトモに昼食もとってないぜ」

俺がそのように答えるとリリウム嬢は僅かに苦い顔つきなる。そして「ごめんなさい」という言葉と共に頭を下げ始めた。全くもって謂れのない謝罪だが、自分が失言を重ねたという事は分かる。というか自分よりも１０歳ほど離れた少女に頭下げさせるって、情けない事この上ない。

「お、おい。頭を上げてくれ、どうしたんだ急に」

「それは……。いえ、ただもっと私が出撃出来れば、ダイキ様の負担も」

基本的に感情が表に出ない彼女が、こうも弱気になるのも珍しい。とはいえこの件において、リリウム嬢にはなんの責任もない。すべては王小龍の采配であり、さらに言えばＢＦＦに所属するリンクスの不足が原因である。

「俺のランクは１７で、アンタは2だ。ＢＦＦの切り札を他の企業（やつら）に見せる訳にはいかないってのは、リリウム嬢にも分かるだろう？」

「……ええ、存じております」

「そういうこった。逆に言えば、俺の手に負えない案件はアンタが代わりに出張らな

きゃいけないんだ。だからなんだ、これでも頼りにしてるんだぜ?」

「ダイキ様……」

慰めの言葉ではあるが、嘘偽りのない事実である。実際リリウム嬢の実力は折り紙付きである。オーダーマッチで一度対戦したことがあるが、とても勝ち目が見えなかった。ＡＭＳ適正、リンクスとしてのセンス共に俺より数段上だと心得ている。

だから実力の面で言えば、それはもう信頼してる。しかし同時に、まだ２０にも満たない少女にとりわけ危険な戦場を任せるわけにはいかないとも思う。汚れ仕事は俺みたいな人でなしに任せればいいのだ。

「さて、そんじゃあまぁ俺は部屋でカップ麺でも食いますかね」

ぽんぽんと、彼女の肩を叩いて歩を進める。ちょっと気恥ずかしくなったからだろうか、逃げるように彼女から離れようとすると――――

「ん?」

「……あ」

右手を掴まれた。メッチャ柔らかい。彼女の顔はほんのり朱色に染まっていた。なにこの可愛い生き物。

「その。では、差し支えなければ私も一緒に、よろしいでしょうか?」

こんな夜遅くに飯食うと太るぞって、言いたくなるのを堪える。同じミスはしない性

質だ、俺は。

「それはありがたい。こんな綺麗な女性と飯が食えるだなんて、光栄の至りってなもんですよ」

「……綺麗な女性、ですか」

「そうだとも。リリウム嬢ほどの美人、そうはいない」

贔屓目かもしれないが、少なくとも俺からすれば彼女は現代日本のテレビで活躍していた女優にも勝る美貌の持ち主である。それでいて丁寧な言葉遣いなのだから、高嶺の花と呼ぶに相応しいお嬢さんと言えるだろう。尤も年齢が年齢だけに、手を出す気にはなれんが。というかそんなことしたら間違いなく王小龍に殺される。

「ん？　でも待てよ。流石にリリウム嬢にカップラーメンを食わせるのは……」

「こちらで用意いたしましょう。元よりそのつもりでした」

「マジか、用意が良いな」

流石は名門ウォルコットの女王。今日の晩飯は期待できるぞ。

「案内します。ダイキ様、こちらへ」

「おう、楽しみだ」

思ったことを口にすると、彼女もその人形のように整った顔を綻ばせる。勘弁してほしい。可愛すぎて口元が気持ち悪くならないようにするのが難しいのだ。

「……ええ、楽しみですね」

ダイキが正面を向くと、リリウム・ウォルコットは複雑そうに笑った。

「ごめんなさい」

その言葉と同時に、ダイキの視界は黒で埋め尽くされる。糸の切れたマリオネットのように、彼はプツンと倒れた。

リリウム・ウォルコットの場合：２

ダイキ・イシザキ。彼はカラードランク１７、ＢＦＦ所属のリンクスである。

ＡＭＳ適正は歴代及び実存するリンクスの数値と比較するとおよそ平凡的だ。とある条件下では高位リンクスに迫る物があるというが、安定した性能を出せないのであれば考慮に値しない。可もなく不可もなく、それが彼に与えられた評価である。

もっともそれは空に逃げた企業（卑怯者）から見た所感である。彼と共に戦場を駆けた者たちからすれば、全く別の感想を抱くのがある意味彼の本質と言えた。

例えばＧＡのリンクス、メイ・グリンフィールド。曰く「相性が良すぎて、ええ。怖すぎるわ」との事。

あるいは敵対するインテリオン・ユニオンのリンクス、ウィン・Ｄ・ファンション。「悪くない戦士だ、ＢＦＦの者でなければ引き抜いていた」と、ランク３のリンクスが彼を手放しに評価することもある。

人格も企業（ＢＦＦ）にとって理想的と言えた。従順で、反抗せず、そつなく任務をこなす。加えてコミュニケーション能力に富み、現場の人間には好かれる傾向にある。リリウムがＢＦＦの切り札で、王小龍が陰謀屋だとすれば、ダイキ・イシザキは鉄砲玉と言ったと

ころだろうか。何にせよ評価の割に、彼は重用されていた。

リリウム・ウォルコットがダイキ・イシザキと出会ったのが6年前。ＢＦＦがリンクス戦争によって齎された壊滅的な被害から、ようやく立ち直り軌道に乗り始めた頃の話である。

王小龍に見出された彼は今と変わらずどこか楽観的な人物だった。対して同じく王小龍にＢＦＦの王女として祭り上げられたリリウムは十代半ばという年齢でありながら、主の指示を待つ機械そのものだった。

共に王小龍の傀儡なのにこうも違う。その違和感がリリウムの初めて実感した人間らしい感情だったのかもしれない。しかし感情とは、王小龍に使われる事が唯一の存在意義であった彼女が自ら不要と切り捨てた機能である。だから最初の内は己の変化にすら気が付く事はなかった。

そうして放置し続けた違和感が溢れると、彼女はどうしてか彼を目で追うようになっていた。そうなると見えてくるモノもあって。彼と会話する人はいつも笑顔で、そして楽しそうである事。そもそも彼の周りにはいつも人がいて、気づけばその輪の中に自分もいた事。あの厳格な王小龍ですら、彼と会話を交えると微笑んでいるという事。

彼の周りではいつも心が渦巻いている。不要と断じたソレに触れる度に、最初の歪は大きくなる。そうしていつの日か彼女は――――

★

リリウム・ウォルコットは罪悪感に苛まれていた。

己を信頼してくれる殿方に、あろうことか背後から麻酔銃を撃ったのである。無論、彼はリリウムに謀られるとは思いもよらなかっただろう。だからこんなにも簡単に事が進んでいる。

「お許しください、ダイキ様。リリウムは貴方のご信頼に背きました」

謝罪の言葉は寝台で横になっている男に向けられていた。しかしそんな殊勝な態度と相反するように、彼女の口元は三日月に歪んでいた。己の罪深さを自覚すると共に、リリウムは確かに歓喜していたのである。

見下ろせば、なんと無防備な事か。こんなにもあどけない寝顔を晒しては、彼が１０歳ほど年が上であると弁えていても母性本能が疼いては庇護欲が湧いてしまう。ああ、でもそれ以上に――――

「はむ」

彼女はより倒錯的かつ本能的な欲求を優先した。

それはいわゆる食欲と呼ばれるものである。

「……っ」

首筋に歯を突き立てられたダイキはその意識が微睡の中にあっても、反射的にその顔を苦くさせた。そして歯に込める力が強くなるにつれて、その苦悶の度合いも大きくなる。期待通りの反応にリリウムは密かに満たされた。ＢＦＦ女王の系譜を存分に受け継いでいるという事なのだろう。

しかし、まだ足りない。

「……ん」

犬歯がついに皮を破ると、彼の首筋から血液がこぼれた。その真っ赤な液体は思っていたよりも生命を感じさせて、リリウムは震える。これが彼の身体を何度も巡る代物なのだと。

ソレを摂取することが如何に冒涜的かを彼女は十二分に理解している。しかし己が慕う殿方の血液を体内に取り込むことが酷く甘美に思えて、どうしようもなく抗い難い衝動であったのだ。

この異常とすら形容できる欲求に、リリウムは一年もの間耐え忍んだ。この世界における常識にどれだけの価値と信頼性がおけるのかはともかくとして、人並みに善悪が判断できる彼女にとっては己が内に生まれたその願望が明らかに常識的ではないと理解していたのである。だからここ一年はダイキと顔を合わせる度に、いつも乾いた衝動が

彼女を苦しめていた。

「……頭では分かっているのです。こんなの、いけないことだって」

そんな事、言われるまでもない。暴行して、監禁して、挙句の果てには食そうというのだから。正気の沙汰ではない、あまりに倒錯的だと加害者本人も自覚している。

「でも、お許しくださいね」

今日まで抗えたのは、彼に対する精一杯の誠意と尊敬の意を抱いていたからだ。

だがもう無理だ。もう限界である。誰かに奪われる前に、奪ってやる。

彼の首からしたたり落ちる血液を、舌を擦りつけるようにして口に含んだ。すると――

――――

「――――なんて、背徳的な」

己の罪深さに。或いはその香しさに。危うく放心する程に、心から打ち震える。

それからはもう、リリウム・ウォルコットは止まれなかった。大胆にもダイキの身体に馬乗りになって、傷口を中心にゆっくりと丹念に舐め回す。肌がふやけ始めても、それはまだ止まることは無い。寧ろ一線を越えてしまったことで欲求は際限なくなる。

「ん、もっと、です」

歯をたてて、彼女がつけた傷を更に広げるようにして血を掻き出す。夢中になるうちに、ダイキの首に腕を回していた。気づけば抱きしめるような体勢になっていたのであ

る。まるで恋人のように。

「――――っ!!」

意識したら、抱きとめる腕にもっと力が籠った。呼応するように、みしみしと寝台も軋む。そうして口いっぱいに血液がたまって、一気に飲み込むと――――

「けほ、っけほ」

酷く咽た。当たり前である、そもそもソレは飲み物ではないのだから。味も酷い。とても飲めたものではない。鉄臭さが口に残る。しかし、それでも口から零す事はなかった。すべて飲み込んで文字通り己の糧にする。

そうして彼女は再度、その人形のように整った顔を首筋に埋めて吸血活動に勤しんだ。

堪能する事数十分、リリウムの頭に何かが載せられた。それはごつごつした、皮の厚い掌であった。

リリウム・ウォルコットの場合：3

これはいったいどういう事なのだろうか。

目が覚めたら嘘偽りなくマジの目の前で、リリウム嬢が俺の首に噛みついていた。銀の光沢を放つ頭髪から物凄くいい匂いがするが、それ以上に痛い。と言うかそのせいで起きた。結構顎に力が入っている。

しかもどうやらその傷口から零れる血を飲んでいるようで、割と大きな音を鳴らしながら喉を動かしている。

「――――ん、ゴクっ、んん」

めっちゃ悩ましい鳴き声しますね。地味に指を絡めるようにして俺の手を握ってるし。なんなら空いてる方の腕で俺の頭を抱きしめてるし。ご褒美かな？

「あー、リリウム嬢？」

とはいえ、流石に覚醒してしまったらこのままでいるのも少々居たたまれない訳で。早速だが声をかけたみた。しかしこのリリウム嬢、吸血行為に随分とご執心なようで、俺の声が届く事はなかった。心なしか息も荒くなっており、抱きしめる力も強くなって

いる気がする。

仕方がないので彼女の気が済むまで放置してみた。が、一向に止める気配がない。何この娘、吸血鬼か何かなの？　だとすれば割と納得できん事もない。今更この世界に人間以外の知的生命体がいたところで驚くこともないしな。

でも流石に痛いのでもう止めて頂きたい。彼女の頭を軽く触れて、さりげなく「起きたよー」ってアピールしてみる。するとリリウム嬢はビクリと大きく体を揺らして、そのままビデオの一時停止の如く固まった。仕草一つ一つがかわいいな。

「……おはようさん」

なるべく優しい声音を努める。今のリリウム嬢は正常な精神状態にないと感じたからだ。間違っても突き放すような事は言ってはいけないと。

「とりあえず、話は出来るかな？」

そう尋ねると彼女はゆっくりと首から口を放した。赤い粘着性のある糸が彼女の口元から垂れ下がる。すっげぇいけない気持ちになるな、これは。リリウム嬢はポケットからハンカチを取り出して粘液を拭った後に、「……はい」と小さく答えた。酷く狼狽している様子で、申し訳なさそうに目を伏せている。

一応、アブノーマルな事をしている自覚はあったらしい。ひとまずそのことには安心した。

「よかった。それじゃあ、なんだ。少し座って話そうか」
流石にこのままの状態で会話するのは色々と良くない。なんせ彼女は俺の上体に跨るようにして腰かけているのだ。誰かに見られでもしたら俺は社会的に殺されるし、俺自身理性的な面でよろしくない。
「それは、できません」
しかし返ってきた意外にも否定の言葉だった。マジか、と思った。
彼女は起き上がろうとする俺をもう一度押し倒して、両方の手首をつかんで抑え込んだ。力づくで振り解こうとすれば出来なくはないのだろうが、今はその気になれない。一応、この状態でも対話は出来る訳だし。
「えーとそれはどういう――――」
「リリウムは決めたのです。誰かに奪われるくらいなら、奪ってやると」
ほう。そろそろお兄さんの頭も処理落ちしそうになる。つまりどういうことだ？
それとも俺の理解力のなさが問題なのかな？　なんにせよ、今俺は何一つ状況を理解できてないぞう。
「ダイキ様。不遜にも貴方を愛してしまった事をお許しください。リリウムには、こうすることでしか想いを示せないのです」
ふむ、愛ときたか。確かにマーキングと言う文化（？）は前世から聞いたことはある

が。

とりあえず、もう少し彼女の主張に耳を傾けてみよう。恐らくだが、下手な対応をしたものなら取り返しのつかない事態になる予感がする。そしてソレは俺もリリウムも望むところではない。

「前からこうしてみたいと、想いに耽っておりました。ダイキ様を手籠めにして、乱暴に扱って、いっそ壊してみたいと夢見ていたのです。こんな素敵な殿方を傷つけられたら、どんなに気持ちがいいのだろうと。思いつくことすら悍ましい発想を、どうしても考えずにはいられなかったのです」

そうだろうな、見れば分かる。俺が素敵かどうかはともかくとしてだ。

「これがリリウムの愛情表現で、そして本性なのでしょう。ですから、吹っ切れる事にしたのです。もはや拒絶されても構いません。その覚悟は出来ています。どうせここからは出られないのですから」

吹っ切れちゃったかー。しかしどうして今日になって？　彼女の話から予想するに、長いことその倒錯じみた欲求を抑えることは出来ていたはずである。

そのことを尋ねると、リリウム嬢は隠す気もなく顔を顰めた。

「メノ・ルーという方をご存知ですよね？」

「そいつは――――」

純粋に驚いた。その名は俺を支えてくれるオペレーターの本名であるからだ。現在はとある事情で『ラビアン・ルカ』と名乗り、その素性を隠している筈なのだが。どこから漏れた？　いや、今はそんな事どうでもいい。

「お二人が並んで歩く姿を見て、羨ましく思えたのです。世間一般で言う男女交際とはあの事を言うのでしょうね。ええ、だから私はダイキ様を誘拐したのです」

「それはどうして？」

何となく、見えてきた。もしかしたら俺は彼女にとって極めて残酷な振る舞いをしてしまったのかもしれない。それが例えリリウム嬢の致命的な勘違いだったとしてもだ。

「……リリウムが、己の性でこんなにも苦しんでいるというのに、どうしてあの人は幸せそうにしているのだろうって。求めてやまない常識的な感性を、どうして彼女は持っているのだろうと。リリウムは、リリウムはこんなにも苦しいのにっ！」

――だから許せなかった。

彼女は声を震わせながらそう呟いた。あふれんばかりの感情が籠った言葉に、思わず竦んでしまう。何故ならそこには、明確な殺意が滲んでいたからだ。

だがビビってはいられない。そして間違いは正さねばならない。恐らく初めての『恋』に一番困惑しているのは彼女だ。ここで先達が導かなくてどうする。

「リリウム嬢、君の言いたいことはよーく分かった」

「はい、ですからダイキ様――――」
「でも二つほど、君は勘違いしてる」
彼女が何かを言い切る前に、俺は指を二本、彼女の前に立てて遮った。きょとんと、ほんの僅かに驚いた様子を見せる彼女に、俺は畳みかけるように告げる。
「まず一つ。俺はメノと付き合ってなどいない」
これは純然たる事実である。彼女の身体的な関係上、確かにボディタッチや食事を共にする機会が多いかもしれない。だがソレはあくまで仕事付き合いの延長上であり、リリウム嬢の想像するような男女交際とは程遠い。
「う、嘘です。だってあんなにも……」
明らかに狼狽えるリリウム嬢。嘘じゃあないんだな、これが。確かに仲は良い方だとは思うが、それはどちらかと言うと姉弟関係と言った方が表現としては正しいだろう。だがそれ以上に――――
「二つ。俺は君の愛に応える用意があるという事だ」
何を一人で悲観的になっているのか。早とちりにもほどがある。相手の気持ちを聞きもしないで、勝手に絶望しないでほしい。

★

「俺は君の愛に応える用意があるという事だ」

困惑すると同時に、少女の胸は酷く高鳴った。頭の中ではありえないと不遜な警笛を鳴らすが、男の表情は至って真剣で、そこに虚偽が介在する余地がないのは明白だった。

昔からそうだった。彼はどうあっても嘘をつかない。誤魔化すことはあっても、その言葉と態度にはいつも誠実さと相手を思いやる真心があった。だからこそリリウムは彼に惹かれて、そしてこのような凶行に及んだのだ。

「……り、リリウムは」

何かを伝えたくて、しかし今更何といえば良いのか彼女には分からなくなった。

当然である。これまでの異常な行動の数々が彼女の口から純粋な言葉を奪ってしまったのだから。そしてそのことを何よりも一番、ダイキ・イシザキは理解していた。

「無理して話さなくていい」

「ですが……」

「そうか。言葉よりも態度で示した方がいいよな」

自分から呟いて勝手に納得した。彼は掴まれた手首を優しく解き、静かにリリウムを抱きしめた。先ほどの己の欲求を満たすためだけの激しい抱擁などではない。ただ相手を慮るだけのソレは狂気の縁に立っていた彼女の心を鎮める。

リリウム・ウォルコットは幼い頃に両親を失い、およそ愛と呼べるものを享受し得なかった。だからこそ分かる、これを味わえばもう戻れない。

「いいんだ、もう我慢しなくて」

差し出すように彼はうなじを首筋を見せつける。それがたまらなく嬉しくて、でも切なくて。どうしようもなく体の底が熱くなる。

「……ほら、どうぞ」

何より、なんて甘い囁きだろう。そんな事を言われてしまったら――

「――はむ」

もう二度と正気ではいられない。

リリウム・ウォルコットの場合：4

パチリと目が覚める。とりあえず、なんか色んな体液が混じり合ってぐちょぐちょになった寝台から降りた。ずきりと首筋の傷が疼いたので触れてみれば、医療パッドが貼られていた。他にも手首や喉元にもソレは貼られており、なんなら首輪もつけられていた。

「やっちまった」

頭を抱える。昨夜の記憶が如実に蘇ってしまったのである。

結局、俺とリリウムはやるところまでやってしまった。それはもう言葉では表現してはならない程度には、お互い獣になっていたと思う。リンクスとして鍛え上げられた肉体を、お互い遺憾なく発揮していた。

特にリリウム嬢の体力とパワーは本当に凄まじいものがあった。普段抑えてる子って本気出すとやばいんだなって。情事の最中、無言で首輪をつけてきたときはマジでぶっ飛んでると思った。悪い気はしなかったが。

「あーこれはひどいな」

ベッドを見返せば、案の定筆舌に尽くしがたい惨状が広がっていた。昨日の成果であ

る。とはいえいかにも高級そうな寝具を汚したことに、軽く罪悪感を覚える。どうすればここまで激しく汚せるのか。臭いも酷いし。たぶんもう使い物にはならないだろう。

「ん？　そういえばリリウムは」

周囲を見渡せば、この場に彼女がいない事を知る。ともするとほんの少し不安になって気づけば、俺は無意識の内に彼女を探し始めていた。俺もダメだな、こりゃあ。

「手紙？」

ベッドの隣に置かれたテーブルの上に、ソレはぽつんと置かれていた。中には着替えと朝食を持ってくる旨が書かれており、状況的にリリウムが執筆したものであると分かる。手書きとはまた古風な。

「……ふぅ」

ひとまず安心した。そんでもって腹が減った。シャワーも浴びたい。よく考えれば、昨日は結局何も食べてないんだったな。それであれだけ動けたんだから俺もまだまだ現役という事なのだろう、色んな意味で。

「……王小龍にはなんて説明しようか」

冷静になると、今度は現実的な不安が現れた。思い浮かぶのは冷たい眼差しで俺を見据える梟親父の顔。クッソ怖い。

「何を言っても怒るだろうなぁ」

意外かもしれないが、あの髭を蓄えた陰気な老人もまた、リリウムを娘のように大切に思っている。彼の立場上、それが表に現れる事は決してないだろうが。陰謀屋ってのも大変な役割だな。だからまぁ、嫌みの一つや二つくらいは覚悟しよう。

「お待たせしました、ダイキ様」

リリウム嬢が衣服とタオルを両手に部屋に入ってきた。どうやら彼女は身を清めた後のようで、ほんのわずかだが髪が濡れていた。こうしてみるとやっぱり別嬪さんだ。

「おう、待ってないよ。おはようさん」

「……はい、おはようございます」

何故か目を背けて、上気した顔のまま挨拶を返すリリウム嬢。はて。

「顔が赤いけど、どうした？」

「いえ、その、ダイキ様。……どうか服をお召しになって下さいませ」

「っあ」

言われて気づいた。現在の俺、下着以外の衣服を何も纏ってなかった事に。

「す、すまん！　見苦しいもの見せたな!!」

「と、とんでもありません！　見苦しいだなんて！　ダイキ様の肢体は立派でございます！」

「え？」

「……あ」

墓穴を掘り合う男女。暫くの間、お互い目を合わせて会話が出来なかったという。

★

「下世話な話してもいい？」

「構いません」

シャワーを浴びてすっきりして、ほとぼりが冷めた頃に共に朝食をとった俺とリリウム嬢。因みに朝食はオムレツだった。卵料理とか久しぶりに食ったけど、すっげぇうまかったです。

今日の仕事は午後からという事で、少しばかり時間を持て余した俺はリリウムの提案でリラクゼーションルームで日向ぼっこしていた、もちろん一緒に。室内で日向ぼっこというのも不思議だが、何もおかしな話ではない。リアルと遜色ない自然の映像と気温調整、ＢＦＦの変態技術って奴だ。

「今朝俺の裸見て赤面してたけどさ、あれ今更じゃない？」

「……それは」

答えに窮したらしく、リリウムは目を閉じて押し黙る。こうして仕草や態度で感情を

表現するようになった彼女を見ると、出会った当初のお人形さんと形容するのが一番適切だった頃の彼女を知る俺としては、何と言うか感慨深い気持ちになる。ホント、随分と愛らしくなったものだ。

そんな風に見ていると、リリウム嬢は何か思いついたのか僅かに微笑みを湛える。可愛い。

「リリウムは理性の歯止めが少々利きません。ですから、あのまま直視していたらきっとまた獣性を発露していたでしょう。それでもよかったのであれば、今すぐにでも始めますが」

口調柔らかに話す彼女は、言葉とは裏腹に卑しくその口元を歪めて挑発を始めた。このギャップ差が凄まじい。

朝食の時からそうだったが、普段は昔と変わらずに清廉な雰囲気を身に纏う癖して、会話の節々でいっそ怖くなるくらい淫靡になる。そしてこの彼女の変貌に戸惑いつつも、心のどこかではドキドキしてる自分がいる事に驚く。変態なのは俺もか。

「いや、よしておこう。やるんならせめて今夜だ」

「同意します。責務を放棄するわけには参りません、お互いに」

「そうだな」

昨夜の出来事で吹っ切れた影響だろうか、今のリリウム嬢には余裕がある。だから

か、彼女の隣にいるだけで強い安心感を得る。安直な言い方をすれば、凄絶な成長を遂げたのだろう。男という身の上としては少々複雑な心境だが、喜ばしく思う。

「ああ、ですが。昨夜のような情交は自重しようと思います」

穏やかな顔つきだった。一方俺の方はと言うと、意外な言葉に間抜け面を晒していた。

「いいのか？」

尋ねると、リリウムはその細くしなやかな指を俺の指と絡めてくる。こそばゆくも温かい。握り返すと、呼応するように彼女も力いっぱい握りしめた。

「……ええ。ダイキ様のおかげです」

「俺の？　何かしたっけ？」

「言葉にするのは無粋でしょう」

きっぱりとした物言いだった。恐らく、無理に問い詰めれば彼女は話してくれるのだろう。だが、そうするとリリウムの言う通り無粋な結果になるのだと思う。だから俺もお茶を濁すことにした。

「そういうものか？」

「そういうものです」

静かに、しかし目一杯の笑顔で答えるリリウム。不覚にもときめいてしまった。する

と彼女がくすりと笑って次にこう言った。

「でも、いつかまた乾くのだと思います。その時はきっと、受け入れてくださいね」

「お安い御用さ」

少なくとも首にはめられたこれをつけている内は、俺は彼女のモノである。それこそどう扱われても構わないと思っている。そしてもしこの首輪が外れるとしたら、それは俺が戦場で死ぬ時くらいだろう。

「さて、そろそろ行くわ」

時刻は既に15時。ブリーフィングまであと2時間以上あるが、機体の調整や準備はしっかり行っておきたい。俺が立ち上がると、リリウムは握っていた手を名残惜しそうに放した。

「今夜また会おう」

「ええ、そのつもりです」

存外強かっただった。でも、それなら俺も安心できる。だから心置きなくリラクゼーションルームを後にしようとすると――――

「お待ちください」

リリウム嬢に腕を引かれたと思ったら、その勢いのまま唇が合わさった。昨夜のように貪り尽くすようなキスではない。ほんの僅か、一秒にも満たない接触だった。

「え？」

突然の出来事に混乱している俺の前で、彼女は満足そうな表情のまま自然な所作で一礼した。

「行ってらっしゃいませ、ダイキ様」

こくりと、首を小さく傾げながら悪戯っぽく微笑む彼女を見て、してやられたと、そう感じた。だから俺は負けじと声を低く唸らせながら、

「よし、今日の夜は覚悟しておけよ」

と、負け犬染みた発言の後に退出する。するとリリウムは背中越しに告げる。

「はい、お待ちしております」

顔は見えなかったが、きっとそれは、心底綺麗な笑顔だったのだろう。

メイ・グリンフィールドの場合

メイ・グリンフィールド。カラードランク19、重量二脚ネクスト『メリーゲート』を駆るGA社所属の女性リンクスである。

GA特有の頑強な構造を持つ彼女の乗機は、彼女の安定した技量も合わさりカラード屈指の支援機として名を馳せていた。またメイ自身、実直かつ現実的な考えの持ち主であり、奇抜な人間集うカラードの中でも特に常識人として知られている。

したがって、現代日本の常識が染みついた俺ことダイキ・イシザキと波長が合いやすい人物でもあると言えた。いやホント、マジでいい人です。

「うっす。メイ、今日はよろしくな」

俺が属するBFFはGA社の傘下という事もあり、彼女と作戦を共にすることが多い。加えて俺が扱うネクスト『ストレンジャー』は中遠距離に適した機体構成をしているから、俺の前で壁として立ち回る彼女の『メリーゲート』とはかなり相性が良い。

「ええ、よろしく」

手を差し出してくるメイ。俺もそれに応じて手を握った。

「しかしまたランドクラブ襲撃の依頼か、飽きないねぇ。GAもインテリオル・ユニオ

ンも」

今回の依頼主はＧＡ、鹵獲されたＡＦを破壊してほしいとの事。オニール君から詳細を聞いたときは「またか」だなんて、思わず失笑してしまったくらいである。手間をかけて鹵獲しようとするのだから、それだけ信頼性のある兵器って事なのかもしれないが。

「きっとお偉方も考えがあっての事でしょう。知らないけどね」

「珍しい、お前が皮肉だなんて」

「いい加減飽き飽きしてるって事よ」

「なるほどな」

雑談もそこそこに、出撃の準備を進める。パイロットスーツやヘルメットの装着を始める。一応異性という事もあって、着替えの際にはなるべく視界の中に入れないようにするが、仮に目に入ったとしても特に気にする事はないだろう。戦場を前にして発情するほど、お互い間抜けではないという事だ。まぁでも、エチケットやマナーを忘れる程野蛮人でもない訳で。

「それじゃあ、背中は任せたわ」

「おう」

足取りは軽い。いつも通りに仕事をこなして、いつも通りに帰るだけだ。

★

『お疲れ様。相変わらずの狙撃ね』

「そちらこそ。いい立ち回りだった。アンタと組むと仕事がやり易くて助かるよ」

ランドクラブとその他ノーマルを沈めて、ブースターを吹かして地上を滑空するネクストが二機。俺とメイである。指定されたポイントまでは自力で向かい、そこでヘリで回収されるというのがネクストの基本的な帰還方法である。これは居住区をコジマ粒子で汚染しないための配慮である。

したがって、回収されるまでは通信で駄弁る余裕がある。無論、周囲の索敵は怠らないのだが。

『やっぱり相性が良いみたいね、私たち』

「はは、違いない」

メイの軽口に応える。相性云々は彼女の口癖なのかもしれない。ミッションが終わるたびに聞いている気がする。

『ねぇ。この後時間あるかしら？』

「ん？　今日は特に何もないが」

メイの唐突な質問にこの後に何か予定がなかったか思考を巡らすが、特に何もないことを悟る。そうか、今日は珍しく2件しか依頼がなかったんだったな。

『ちょっと付き合ってもらってもいいかしら。いいお店見つけたの』

「それはサシでの飲みって事だよな？」

『ええ。ダメかしら？』

一か月前の俺だったら喜んで彼女の誘いに応じていただろう。しかし今の俺にはリリウム・ウォルコットという特定の女性がいる。安易な考えで行動するのは厳に慎むべき立場だ。とはいえ、何も知らないメイに対していきなり態度を変えるのもまた違うように思う。

「おっけ、ただちょっと上司に報告しなきゃならん事がある。それからでいいか？」

したがって、まずはリリウムに話を通すべきと考えた。場合によってはやばい未来もあり得るかもしれないが。独占欲強そうだからな、あいつ。

『上司？　ああ、王小龍の事かしら。貴方ほどの人が彼の言いなりというのも、何だか不思議な話ね』

そしてうまい具合に勘違いしてくれたメイさん。なんというか本当に申し訳ない気持ちになる、すまん。

「それは買いかぶりってなもんだ。それに、あの人もあの人なりに苦労してるからさ。

許してやってくれ」

『……そう。貴方がそういうなら』

渋々といった様子が声音から伝わってくる。同じＧＡグループ内人間にさえ、こうまで王小龍は警戒されている。とすれば、それはもう肩身が狭い思いをしている事だろう。ホント、つくづく陰謀屋ってのは大変だな。俺には到底無理な役割だ。

暫くした後。レーダーによるシグナルから友軍機が近づいてくることに気づく。速度的に回収用のヘリであるのは間違いない。

「お、そろそろヘリが来そうだ。とりあえず後で連絡するよ」

『ええ。楽しみにしてる』

★

メンテナンスが終わりネクストから降りた後、リリウム嬢と連絡するためにすぐさま俺は携帯端末を操作する。するとワンコールで繋がった。はや。

『はい。任務ご苦労様でした、ダイキ様』

「ありがとう」

すぐさま労いの言葉が出てくるあたり、俺のスケジュールを全部把握してるんだろう

なぁ。別に隠すことでもないから構わないのだが、その情報はどこから仕入れてるのだろうか。いつの日かのメノ・ルーの件然り、普通に気になるところである。

「ところでリリウムさん、ちょっとお願いがあってですね」

『はい』

「えっと、今日ちょっと飲み会に誘われておりまして」

『はい』

ただの返事が何故か怖く感じる。それでもしっかり伝えようとすると――

「その相手が……」

『メイ・グリンフィールド、でしょうか？』

リリウムが俺の発言に被せるように、その名前を告げた。いつも通りの抑揚のない声。ただ、心なしか少し冷たいニュアンスを感じる。そして恐らく気のせいではないのだろう。

「ああ。ダメかな？　彼女には世話になってる」

『……彼女なら、構いません。私もあの方には何度か相談を聞いて頂いたので』

意外にも好感触な返答に驚く。個人的には助かるが。というかリリウム嬢とメイの間に交友関係があったことにも驚きである。

「悪いな。埋め合わせは必ずするよ」

『もちろんです。明日、楽しみにしておりますね』
「はは。お手柔らかに」
最後にそう告げてから通話を切る。そしてメールでメイに『飲みに行けるぜ』と送ると、数秒後に『待ってるわ』とすぐに返事が来た。お前も早いな。
「さて、それじゃあ行きますかね」
荷物を纏めてロッカールームから出る。日本酒が飲める店だったらいいなぁ。

メイ・グリンフィールドの場合：2

懐かしい大衆酒場、言ってしまえば居酒屋にて。

有澤重工の職員に向けられたこの居酒屋はメイの言う通り、確かに『いいお店』と言えた。店に流れるＢＧＭ、置かれているお酒、おつまみに料理。何もかもが懐かしい。不覚にも前世の記憶を思いだして涙腺が緩くなる。

ＢＦＦはイギリス系統の企業である。したがって、その周辺の店もどこか格式ばったモノが多かった。もちろんそれはソレで悪くないし、冴えない俺でもマナーさえしっかり押さえてれば何かを言われることもない。しかし、やっぱり俺にはこれくらいゆるーい雰囲気が合ってる。

こんな素晴らしいお店を紹介してくれたメイには何て感謝すればいいのか。本当は素直にそう伝えたいのに、今日のメイはどこか変だった。主にお酒のペースが異常だったのである。

「おーい飲み過ぎだぞー」

かなり気持ちよくなっているようで、肩に寄りかかってくるメイに対しそのように告げる。

「そうかしら。これくらい普通よ」
「顔を真っ赤にして言うセリフじゃあないぞ」
確かに彼女は酒豪である。何度か飲み交わしてるから、それは疑いようもない。お酒が大好きで、凄まじい肝臓の持ち主であることを知っている。しかしあまり慣れてないであろう日本酒の栓をパカパカ開けては、ばくばく飲んでいく様を見れば流石に心配にもなる。
「……そういうあなたはあまり飲んでなさそうね」
「日本酒ってのはそう沢山飲むもんじゃあないのさ」
お猪口をあおりながら応える。そんでもってお塩がかかった天ぷらも食べる。すっげぇうめぇ。まさかこんな世紀末な世の中でここまで贅沢出来るとは。
「でも飲み比べって文化があるそうじゃない」
壁に貼られている『お得!!　お好みのお酒三種、飲み比べ!!』と書かれたメニューを見ながら、メイは不満げに告げる。完全に出来上がってると分かる。
「一本空ける事を飲み比べとは言わんだろ、流石に」
別にそういう事に明るいわけではないが、少なくとも間違った事は言ってないと思う。何か複数のお猪口に別々のお酒が注がれてたような、そんな感じだったと記憶してる。

「いいのよ。吐かなければ」
「確かにそうだが。あーでもアレだ。そんな簡単に男に寄りかかると勘違いされちゃうぜ」
「……勘違い、ね」
目を伏せながら、メイは僅かに口角を上げた。或いは、俺には自嘲しているようにも見えた。
「どうした？　最近あまり調子よくないのか」
「いえ何でもないわ。でも、そうね。今日が最後だと思うと、ちょっとね」
「最後？」
「……付き合ってるんでしょ？　ＢＦＦの王女様と」
これは驚いた。俺とリリウムが交際関係にあることはまだ王小龍一人にしか明かしてない。苦言と嫌みの数々を吐かれたものの、それ以上どうこうされることは無かった。一応祝辞が書かれた手紙を渡されたし。素直じゃないのがまた彼らしい。
閑話休題。
つまるところ、その情報を知るには俺とリリウム本人か、もしくは王小龍を通さなければあり得ない。無論俺はメイに話してないし、機密に近い情報をあの老人が話すわけもなく。とすれば何故か交友関係にあるリリウムが彼女に告白したという事なのだろ

うが。
「……まぁな」
なんにせよ申し訳なく思った。もしかしたら気を遣わせてるのかもしれないと、そう感じたからだ。だから質問に対する返答はせめて正直であるべきとも思った。
「ふふ、どうしてそんな顔をするの？」
「いや、なんつーか。気を遣わせちったなって。悪い」
「そんな事はないわよ。寧ろ謝るのはこちらの方。ごめんなさいね、事情を知ってるのに誘っちゃって」
憂いを帯びた表情で話すメイ。胸が痛くなるのは、多分俺にも非があるからだ。しかしそれがどういった過ちなのかが分からないところが、俺の俺たる所以なのかもしれない。
「でも、なんだって最後なんだ？　別に個人的な付き合いならこれからも――――」
「私、これでも貴方に好意を持ってるの」
穏やかに微笑みながらメイは囁いた。色々思うことはあった。しかしそのどれもが的外れな気がして、俺は答えに窮してしまう。
「んー。いい顔。それだけで、十分よ」
「お前、何を言って」

「気に、しないで。これはただの、自己満足だから。私はね、私は――――」

とろんと。俺に寄りかかってた彼女が不意に前のめりに倒れる。それを慌てて受け止めるが、既にメイの意識は微睡の中にあった。すぅすぅと、心地よさそうに寝息をたてながら静かに目を閉じていた。

「……どうすっかな」

無理やり起こすのも忍びない。というか起きそうにない。しかし、かといってこのまま放置するのもよろしくない。何より彼女を送ろうにも、俺は彼女の住まいを知らない。となれば――――

「悪いな、リリウム」

メールで今回の事情を全て伝えた。それでリリウムが許してくれるかどうかは分からない。意外にも返事はすぐに来ることは無かった。ともすれば、ソレが答えなのかもしれないが。

どうあれ、俺はメイを自宅に連れて帰る。

「――――ごめんなさい。ダイキ、ごめんね」

寝言であろうと謝り続ける女を一人残す。そんな無責任なこと、俺には到底出来ない。

メイ・グリンフィールドの場合：3

目が覚める。カーテンを照らす日差しは眩い。

「……人が良すぎるわよ」

見知らぬ部屋、口に残る酒精、暖かいベッドと掛けられた毛布から香る男の匂い。それで何となく、自分の置かれた状況を理解する。そして昨夜、己が粗相を犯したということに思い至り、メイ・グリンフィールドは重苦しく息を吐いた。

「あーもう。本当に」

悪態をついた後、メイは寝台から身を起こす。あまり音をたてないように部屋を出るとそこはリビングだったようで、そこそこ大きいテレビの前に配置されたソファで彼、ダイキ・イシザキは眠っていた。

男らしい寝息、と言えば聞こえはいいだろうか。些か煩わしい鼾を聞きながら、メイは彼もまた一人の男である事を自覚した。そして容姿や動作の割に、その性質が紳士に近しいという事も。同じＧＡグループのリンクスでもここまで常識的な人間はカラードランク４、ローディくらい思い浮かばない。

「……人の気も知らないで」

昨日の飲み交わしはメイの自己満足だった。彼を困らせて、その困った顔を肴にお酒を飲んで、そして二度と対面するつもりはなかった。自分の存在が彼の心に少しでも残れば、少しでも響けばそれでいいと思ったのだ。

どうしてだろう。自然と涙があふれる。

嬉しいはずなのに、切ない。飲み潰れてしまったのは完全に自分のペース配分を怠ったがためであると、彼女自身理解している。だから放って置けば良いのに、それが許せないのであればＧＡの社員だったり店側に預ければいいのに。彼はどうしてかメイを自宅で寝かした。

それが善意で、彼なりに考えた行為であることをメイは知っている。

「……あなた、彼女がいるんでしょう?」

きっと苦心したに違いない。特定の女性がいながらも、他の女性を自宅に置くことに何の抵抗もなかったわけがない。それでも実行したという事に、メイは嬉しくも苦い感情を覚えた。

しかし、彼にとって自身は多少なりとも大切な存在であるという実感をメイは得る。そしてその実感こそがメイの求めて止まない欲求に他ならなかった。

「本当に、私はなんて———」

醜い女だろうと、彼女は独り言ちる。意中の男を傷つけることに躊躇いがなく、自信

の欲求が満たされれば更に上を夢見てしまう。だから恋は実らないのだ。

でもそれでいい。実らなくても構わない。メイ・グリンフィールドという個人が、ダイキ・イシザキという個人に刻み込まれているのであれば。こんなにも混沌とした世の中で、こんなにも素敵な男性に覚えてもらえるだけでも望外だ。

しかしただ覚えてもらうだけでは意味がない。夢で魘されるくらいの強烈さがなければ、何の意味もない。

だから例えば――――

「ここで自殺したら、あなたはどう思うのでしょうね」

きっと苦しんでくれるだろう。メイの突拍子のない死に様に、彼は見当違いな罪悪感を抱いてくれるだろう。そしてずっと、ずっと覚えていてくれるだろう。メイ・グリンフィールドという哀れな女がいたという事を、一生大事に胸に秘めていてくれるだろう。何故ならダイキ・イシザキという男は残酷なまでに優しい人なのだから。

あまりに倒錯的で、そしてどうしようもない破滅願望。

メイは愛しい人と共に生涯を歩むという未来を視る事はない。何故なら彼には既に愛すべき隣人がおり、そして彼の幸せを心から祝福したいという想いが彼女の中にあったからだ。

だがそれでも何かを残したい。恋したことをなかった事にしたくない。それをどん

な形であっても彼に伝えたい。綺麗なだけで終わらせたくない。鮮烈で悍ましい愛を受け取ってほしい。

「だから、だから――――っ!!」

メイは自分のこめかみに銃を向けていた。護身用として持っていたその得物は、この世界では決して強力な代物ではない。しかし人を一人殺す分には何の不自由もないのも事実だ。

この引き金を引けば自分は死ぬ。そうすればメイは晴れて己の目的を達成する。

「――――ん、んん!!」

だというのに、メイは引き金を引けずにいた。手は震えて、涙がこぼれる。女性としておよそ整っていると言える顔を酷く歪めて、苦悶の声を上げた。

彼女は恐怖していたのだ。それは、決して命を投げ出す事にではない。矛盾するようだが、自身が死ぬことによって、彼の心に深い傷を負わせてしまう事がどうしても在り得なかったのだ。

ごとりと、拳銃が落ちた。

「結局、最後まで意気地なしじゃない」

瞼を泣き腫らしながら彼女は呟く。

どうしてもダメだった。自身の欲求に感けて彼を傷つける。それはメイの彼に対す

る愛には違いない。だがソレは彼の事を何も考えてない一方的に過ぎる愛だ。
不思議な話だ。想っているから、傷を残したいのに。それは決して彼のためではないのだ。どこまでもいっても自己満足で終わってしまう。
「……それでいいと、思ってたのに」
この心の内に夥しいほどに詰まった愛は綺麗である必要はない。だがその愛を伝えるには、あまりに彼を好きになりすぎてしまった。
好きな異性の前では綺麗でありたい。そんなありきたりな願いの方が、彼女にとっては大事だったのだ。

★

がちゃりと、玄関を開けてダイキの部屋を後にする。するとその先には銀の長髪を携えた少女がいた。
「……いいんですか?」
そして出合い頭に、少女は気後れするように尋ねる。
「――――ええ。これでいいわ」
多少驚きつつも、晴れやかにメイは答えた。その顔には一切の後悔が見られなかっ

た。

「それにまだ結婚はしてないんでしょ？　なら、私にもチャンスはあるじゃない」

「許しませんよ」

「あら、言うようになったわね。彼のあれこれを教えてあげたのは一体誰だったかしら」

からかうようにメイは告げる。或いは楽しんでいるとも言えた。

「……確かにその件については感謝しております」

「そう。ならこれでおしまい」

じゃあねと、メイはその場を離れる。背を向けた彼女に対して、少女は尋ねた。

「本当によろしかったのですか？」

少女は全てを見ていた。そしてメイの奥底にあった願望は方向性は違えど、本質的に少女のソレと同質であった。故に少女は気になった。

もう満足なのかと。

「私、大人だから」

振り返り際にメイは笑顔で応えた。

それは。とても失恋した者の表情とは思えないくらい、素敵な微笑みだったという。

リリウム・ウォルコットの場合：5

結局のところ、ダイキ・イシザキとメイ・グリンフィールドの関係は続くことと相成った。

最低でも週に一度は共に任務をこなし、その後に飲み会を開く。そのこと自体はダイキがメイと出会った当初から何も変わっていない。ただ昔と違うのはよりスキンシップが多くなった事。

手や体に当たるないし触れる事はもはや当たり前。会話もプライベートな内容が増えた。恐らくはあの日の出来事が関係しているのだろうとダイキは直感していたが、心当たりがないのも事実だった。大体彼が起きた頃にはメイは帰宅していたので、当然と言えば当然である。まさか一人の女性が自殺しようとしていた事など夢にも思わないだろう。

とはいえダイキにも交際関係にある女性がいる訳で。彼は改めてそのことを打ち明け、メイに過剰なスキンシップは控えるように伝えた。しかし驚くべきことに彼女は面と向かって、蠱惑的に微笑みながら「愛人でもいい」と答えたのだ。

当然、ダイキは反応に困った。愛人云々に忌避感があったからじゃない。メイの目がリリウムに近しい本気を越えた熱を孕んでいたと感じたからだ。

そして情けないことに、彼女に気圧されたダイキはこの曖昧な関係にケジメを付けられないでいた。

「……まいったな」

自室の椅子にダラリともたれかかるように腰かけながら、ダイキはそうつぶやいた。

メイ・グリンフィールド。地毛だという緑色の髪が特徴的な女性である。冷静な口調とは裏腹に実直で豪快な性格を持つ彼女は、ダイキにとってこの荒廃した世界で数少ないほぼ無条件で信頼できる人間である（因みに他には王小龍とかメノ・ルーがいる）。

だから彼はメイの告白を大変光栄に思っていた。不純に聞こえるかもしれないが、もしリリウムと交際してなければ彼女の恋心に応じていたかもしれないくらいに。

しかしそれが意味するのは、順番が違えばリリウムの想いには応じなかったかもしれないという事である。ともすれば彼は己の恋人であるリリウム・ウォルコットに対する愛情が酷く陳腐に思えてしまった。醜いと理解していながら余すことなく自分の全てを吐露した彼女に、不義理を働いているのではないかと。

彼は最近、そんな事ばかりを考えている。仕事にも影響が出そうな勢いで思い詰めており、それはもう周囲から心配される始末である。そうして周囲に迷惑をかけていると

自覚すると、それが更に情けなく思えて彼の心はかつてないほど圧迫されていた。

「顔向けできねぇなぁ」

加えて、もう三日ほどダイキはリリウムと会ってない。メイとの関係に折り合いをつけるまで、リリウムと一緒にいる資格がないと考えたからだ。彼女にもメールでその事を伝えた。返信はただ「お待ちしております」の一言で、特に追及してくる事はなかった。そのことを怪訝に思う余裕すら今の彼にはなかったのである。

「どうすっかなぁ」

しつこいようではあるが、ダイキ個人としてはメイを好ましく思っている。仕事の相棒としては非常に頼りになり、プライベートでは食事を共にする仲だ。嫌いになる要素などどこにもない。

しかし異性として好意を抱いているかどうかとなると、それはまた別の話だった。

何故なら元々ダイキは極力メイを異性と意識しないようにしていたからだ。彼は前世の教訓からサークルや会社など、とにかく自身が所属するコミュニティの中では恋愛をするべきではないと持論を持っていた。破局すれば、そのコミュニティ内でずっと肩身の狭い思いをすることになる。その事を彼の前世の友人が教えてくれた。だから彼はメイをあくまで仕事仲間として接する事を心がけたのである。ダイキ自身は兎も角、メイが嫌な思いをしないために。

しかしそれを知ってか知らずか、彼女の距離感は良くも悪くも近すぎた。当初ダイキはメイの距離感を信頼の表れだと考えて自分を律していた。そこには己の勘違いでメイを不快な気持ちにさせる訳にはいかないという彼なりの配慮が起因していた。だがその考えそのものがメイのアピールを全て袖にしていたのだから、なんとも皮肉な話である。

そして先月の自棄酒混じりの大告白。それでダイキはようやくメイを一人の女性として認識してしまった。だがそのころには既にリリウム・ウォルコットという大切な隣人がいて、筋を通すのであれば彼は昂然たる態度で断りを入れるべきだった。とはいっても彼女に冷たい対応をするのは彼の性格上許せることではなく、どうにも優柔不断な性質が彼の決断を鈍らせる。

結局、このややこしい事態は自分が人の心を理解できなかったせいで起きてしまった。少なくともダイキはそう結論付けていた。

「……ああ、全く」

悪態をつきながら、テーブルに置かれたコップにビールを注いだ。そしてソレを豪快にも一気に飲み干すが、喉に突っかかる違和感はまるで消えなかった。

彼自身、自分が難儀な性格をしている事を自覚しているのだ。メイを捨てて、リリウムを大事にすればいい。それが普通であると分かってはいても、実行する勇気がない。

いやソレを勇気とは呼べないとすら考えていた。

しかし、かといってどうすればいいのかも分からない。なんせダイキの恋愛経験はほぼゼロに近い。大学時代に恋人という名ばかりの関係を一度経験したのみで、社会人になってから色恋沙汰とは無縁だった。また、この世界に転生してからそのキャリアが更新された試しもない。加えてスマートな解決策が思いつくほど上等な頭を持ってるわけでもない。

もはやお手上げである。ダイキがそう思っていた時、「ピンポーン」と自宅のインターフォンが鳴った。

「ん？　あーちょっと待ってください」

基本的に企業に所属するリンクスはその所属する企業の領域内で生活する。したがってダイキはＢＦＦに与えられた物件に住んでおり、そこに尋ねる者もまたＢＦＦ社員もしくはＧＡグループの者である。したがって彼は来訪者の確認を特にすることもなく、不用心にもそのまま玄関を開けた。

するとそこには――――

「ごきげんよう。ダイキ様、お久しぶりですね」

彼と恋仲にあるリリウム・ウォルコットが息を呑むほど綺麗な佇まいで一礼していた。銀の光沢を放つ彼女の頭髪は家の明かりに照らされてより一層輝きを増しており、

人形みたく整った美貌と合わさって浮世離れした美しさを備えている。
まるで予想していなかった来訪者に、ダイキは思わずたじろいでしまった。その隙にリリウムはそそくさと家主の許可なく部屋に入り、そのまま彼を押し倒した。
咄嗟に受け身をとれたのは、彼が反射神経に優れたリンクスだったからだ。或いはそれを見越してリリウムも力加減をしていたのかもしれない。何にせよ、二回りも小さい少女に覆いかぶさられた３０近くのオッサンという奇妙な構図が完成した。
「……ああ。元気だったか？」
彼が非難の声をあげる事はない。寧ろ三日ぶりに見るリリウムの顔を見て安堵すると同時に、罪悪感をダイキは感じていた。
「元気に見えますか？」
リリウムは何の感情も窺わせない顔つきで答えた。しかしほんの僅かに目つきが鋭くなっており、ダイキは自分が彼女から非難の視線を浴びている事を認識した。
「すまん」
「その様子では、未だにご自身を責めておいでのようですね」
「……責める？」
彼女の言葉の意味が分からずダイキは反唱するようにつぶやいた。すると彼女はやはり顔色を変えずに、顔だけを近づけて耳元でささやく。

「私は貴方様をお慕いしております」

ゾクリと、ダイキは身を震わした。ねっとりとした彼女の発言はあまりに扇情的で、一瞬で頭の中が真っ白になる。しかしそこは歴戦のリンクス、すぐさま思考があらぬ方向に向かわぬように落ち着きを取り戻した後に彼はこう返した。

「知ってるよ」

「ではダイキ様は？」

リリウムの問いかけに、ダイキは彼女と全く同じ事を伝えようとした。しかし最初の一言を発音する寸前になって、彼は口を閉じてしまった。果たして自分は本当に、リリウムを愛していると思っているのか。先ほどまで頭の中で渦巻いていた疑問が、ここにきて彼を蝕んだのである。

「そうですか」

無言になったダイキにただリリウムは頷く。そして彼の首元にあった首輪にそのしなやかな指で触れ、そのまま強く締めた。

「――――っぐ、っぶ」

ダイキは気管を圧迫され瞬く間に呼吸が出来なくなる。反射的にリリウムを退けようと腕が乱暴に動きそうになるのを、理性で堪える。そしてその苦しさを受け入れるように、彼はリリウムを優しく抱きしめた。

「ああ」

嬉しそうにリリウムはほんの僅かに微笑む。そして彼女は呼吸困難に陥ったダイキの口に、そっと自らの唇を落とした。